



● 金丸弘美

かなまる・ひろみ／食環境ジャーナリスト。1952年生まれ。執筆活動のほか食のアドバイザー事業を手がける。著書に『ゆらしい島のスローライフ』（学研）、「創造的な食育ワークショップ」（岩波書店）、「田舎方 ヒト・夢・カネが集まる5つの法則」（NHK生活人新書）など多数。

11 高知県の

「農業創造 人材育成事業」



【上】レジ袋を廃止し新聞バックを販売
【右】生姜とブルーベリージャムと栗の渋皮煮

高知県は「地産外商」をテーマに掲げ、地域産物の県外の売り出しに熱心だ。同時に地域の人材育成にも力を入れている。県知事直轄プロジェクトで行われているのが、「高知県農業創造人材育成事業」。加工、販売、レストラン、直売所運営などのノウハウを学び、実践の形までもつていくというプログラム。3年計画で進められている。

講師は柚子加工品で知られる高知県馬路村農協・東谷望史さん、道の駅の運営をする株式会社「四万十ドラマ」の畦地履修さん、そして県外では長崎市大村市の直売所「おおむら夢ファームシユシユ」の山口成美さんである。

県内から公募で集まった15グループ42人が参加している。講師のいる現場に出かけて合宿をし、1泊2日にわたって直接リーダーからアドバイザーを受ける。期間中に加工品を作ったグループも生まれた。年配の女性陣は3回の合宿で自分たちの活動のプレゼンをパワーポイントでできるまでになった。

県の補助金申請書も早めに出してあり、具体的な中身をかけるようにも指導する。補助を受けないにしても、実際の活動をするには目標設定が必要だからだ。

四万十ドラマの畦地さんは3人の講師陣でもっとも若い。場所は、ほかの2か所に引けをとらないほどの条件不利地。高知の東西にかけて流れる四万十川の中流域で、高知市内から約2時間。森林が87・1%、田畑は4・8%しかない山間地にも関わらず、3億6000万円を売る。

四万十ドラマのある四万十町は、06年に窪川町、大正町、十和村の2町1村が合併して生まれた人口約1万9000人の町。合併前の94年に2町1村による第3セクターの株式会社四万十ドラマができ、1人の常勤職員を公募、農協職員として地元

で働いていた畦地さんが採用された。07年に「道の駅とうわ」ができ、指定管理者として運営に携わるようになった。現在20人が働いている。

全体のコンセプトを作る上で決定的ともいえるのは、高知在住で当時四万十町に住んでいたデザイナーの梅原真さんとの出会いである。景観を配慮した店舗、ロゴマーク、商品開発を地域素材を生かす形でデザインから考えられている。

ユニークなのが、間伐材を使った「四万十のひのき風呂」。ひのきオイルをしみこませた薄い板で300円。これが2億円の商品となった。エコロジーから生まれたのが古新聞のバック。販売はもちろん折り方セミナー開催も商品化してしまった。

地域の農産物からは栗の渋皮煮、栗きんとんが生まれた。高齢化と価格の低迷で栽培が減少していたものを、おしゃれなパッケージと、一般価格より高めの買い取り、東京のスーパーとの連携による商品開発、手作りを全面に打ち出した。同様にしてお茶やコメなど次々と商品化している。

参加者は、農産物の加工や売り方、デザインまで学ぶ。画期的な農業者講座といえるかもしれない。